

# ロシアとの緊張関係が強まるグルジア

## ～天然ガス供給停止で経済に悪影響～

2006年10月2日(月)

B R I C s 経済研究所 代表 門倉 貴史

E-mail: postbrics@yahoo.co.jp

### ～要 旨～

近年、グルジア経済は好調に推移しており、2005年の実質経済成長率は前年比+9.3%と2004年の同+5.9%から加速した。2006年1～3月期の実質経済成長率も前年同期比+8.4%と高い伸びを維持している。グルジアの主要な産業は、茶や柑橘類、たばこ、ぶどうなどの農産物栽培で、GDPの2割強が農業で占められる。近年は農業生産が好調であることから、これが経済全体の押し上げ要因となっている。

これまでグルジア経済は、慢性的な税収不足による財政赤字に苦しんできたが、最近では、マクロ経済の好調を反映して税収が増えてきたため、財政赤字の縮小と政府債務残高の削減が進んでいる。農産物輸出の増加によって経常収支の赤字幅も縮小傾向にあり、経常収支の名目GDP比は2004年の8.4%から2005年には5.4%のところまで戻してきた。

ただ、今後は政治リスクの高まりによってグルジア経済がスローダウンしてくる可能性が高い。グルジア経済の先行きを見通すうえで、懸念されるのがロシアとの関係の悪化である。近年では、ロシアとグルジアの外交的な対立が強まっている。

両国の対立の背景には、グルジアがNATOへの加盟を希望していることがある。2004年に大統領に就任したサーカシビリ大統領は、親欧米路線を明確に打ち出しており、NATO加盟を外交上の優先課題として掲げてきた。2006年9月には、対話強化の枠組みでグルジア・NATOが合意している。このまま加盟交渉が順調に進んでいくと、グルジアは早ければ2008年にもNATOへの正式加盟を実現する。こうしたグルジアの親欧米路線に対してロシアは警戒感をあらわにしている。

2006年9月27日夜から28日未明にかけて、グルジア内務省がロシア軍将校ら5人をスパイ容疑で拘束したため、ロシア・グルジア間の緊張が一気に高まった。5人のうち1人は9月29日に開放されているが、残りの4人は拘束されたままだ。ロシア政府は、グルジアの措置に対抗するかたちで、グルジア人へのビザ発給の停止などを行っている。現状、グルジアは国内で消費する資源・エネルギーの多くをロシアに頼っており、通関輸入金額の15.4%がロシアで占められる(2005年)。また、農産物輸出の多くがロシア向けとなっており、通関輸出金額の17.8%がロシア向けで占められている(2005年)。

今後、ロシアは、貿易停止などの経済制裁によってグルジアへの圧力を強めてくるとみられる。ロシアから天然ガスをはじめとする資源・エネルギー供給が停止されることになれば、グルジアの経済成長率が鈍化してくる恐れがあることには十分な注意が必要だろう。